

すがたに 須ヶ谷遺跡

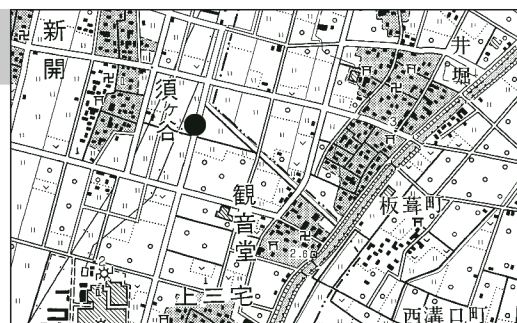
所在地 稲沢市平和町
(北緯35度13分41秒 東経136度45分14秒)

調査理由 県道津島稲沢線道路改築

調査期間 平成17年11～平成18年3月

調査面積 1,341㎡

担当者 石黒立人・加藤博紀・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査区は現在の県道を挟んで東西に位置している。まず、東側 (05A区) から調査を始めた。調査区は北に向かって狭くなるので、北部については土層断面の観察に主眼をおいた。西側 (05B区・05C区) では調査区の幅も広く、面的な調査を進めることができた。

立地と環境 須ヶ谷遺跡は濃尾平野のほぼ中央やや西寄りに位置し、遺跡周辺の現況は水田となっている。しかし、かつては畠が広がる自然堤防地帯であったようだ。北北東には約500mには弥生前期から弥生中期の集落遺跡である野口北出遺跡、北には弥生時代中期後半の集落遺跡である一色青海遺跡がある。南方には古代の三宅廃寺がある。

調査の概要 調査区南部は北部に比べて基盤が下降しており、上部から、耕作土、床土、灰色シルト (古代・中世基盤層)、黒色帯、明黄色シルト、暗灰色シルト、黒色シルト (弥生時代地表面および包含層)、青灰色シルトである (基盤)。それに対して北部では床土直下が弥生時代の包含層であり、かなりの削平が窺える。重要なのは黒色帯で、上部と下部の2層に分かれ、とくに弥生中期中葉後半に属す方形周溝墓の周溝埋土上部に明確に堆積しており、遺構判定の重要な指標になった。弥生時代の包含層は、南半部では弥生前期から中期前葉にほぼ限定され、北半部では竪穴建物跡などの濃密な遺構の分布を伴い中期後半までの時期を含み、一色青海遺跡とも並行する可能性がある。このほか、方形周溝墓や竪穴建物跡上部に粗砂が堆積する場合があります、弥生中期中葉後半の一時期に洪水によって浸食・堆積されたことが窺える。

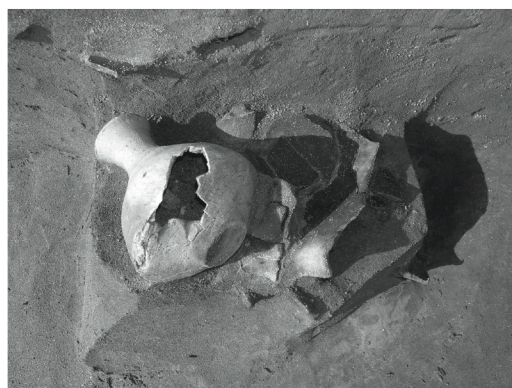
調査は3面に区分して進めた。

第1面は中世以後に属し、流路跡、溝・土坑が検出された。

第2面は弥生時代中期中葉後半以降に属し、方形周溝墓群や竪穴建物跡を検出した。竪穴建物のまわりには外周溝がめぐっていたようであり、調査ではその一部を検出した。方形周溝墓は05B区南部では墳丘の残りがよく、同時期の他の遺跡の周溝墓とは印象を異



C区竪穴住居



C区 周溝墓出土遺物

にする。主体部が検出できたのは1基のみであった。ほかに土坑墓が少数分布するようである。

第3面は弥生前期から弥生中期前半に属し、
竪穴建物跡や土坑を検出した。竪穴建物には覆土中に貝層を伴うものがある。

ま と め 須ヶ谷遺跡についてはこれまで情報は無く、今回初めてメスが入った。付近では野口北出遺跡と一色青海遺跡が知られており、両遺跡との関係が問題となる。今回の調査成果によれば、須ヶ谷遺跡は野口北出遺跡に並行しつつ、一色青海遺跡にも年代的に一部重なりをみせるというように、空白期を埋める位置にある。とくに問題になるのが方形周溝墓群であり、野口北出遺跡の方形周溝墓群に後続して形成されている点で、両者が一連のものならば広大な墓域を形成している可能性が浮上するのである。これら遺跡群の関係について詳細は今後の調査によらなければならないが、弥生時代の濃尾平野に新たな核の姿が浮かび上がりつつある予感を感じさせる。(石黒立人)



B・C区 全景



C区 周溝墓



C区 3面北部



C区 3面南部